

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26820274

研究課題名(和文) イベリア半島中世都市の形成と整備に宗教勢力が及ぼした影響についての建築史的研究

研究課題名(英文) Influence of Religious Forces on the Formation and Maintenance of Medieval Iberian Cities: A Historical and Architectural Study

研究代表者

伊藤 喜彦 (Ito, Yoshihiko)

東海大学・工学部・准教授

研究者番号：40727187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、スペインの都市が中世から初期近世にかけて発達する過程において、宗教施設の建設や宗教勢力の介入がどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることを目的とした。とくに、大聖堂の建設によって都市がどのように変容し、その骨格を定められていったのかに着目し、建設行為や建設物が都市を変容させていく過程を考察してきた。今回の研究プロジェクトではとくにスペイン北西部のレオンと南部のコルドバをとりあげた。レオンはローマ時代の軍営地の骨格の上に初期中世に成立した2つの重要な教会が都市形成の中核となった。コルドバはキリスト教化する13世紀の教区教会群が都市再編に大きな役割を果たしていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify how Spanish cities formed, developed, consolidated, and transformed during the Middle and Early Modern Ages. The study is to analyze especially how the interests and interventions of religious groups, crystallized in the construction of religious buildings, influenced this process. One of the most prominent examples would be the construction of cathedrals during the Middle Ages. In this research project, two Spanish historic cities have been studied: Leon in the northwest and Cordoba in the south. Leon, formed on the structure of Roman castrum, was consolidated during the early Middle Ages around two important churches (San Isidoro de Leon and the Cathedral of Santa Maria de la Regla). During the christianizing process of 13th century Cordoba, parish churches had a pivotal role to transform the city. Both examples studied in this project are just a part of an extensive study on history of Spanish medieval urbanism to be continued.

研究分野：スペイン中世建築史

キーワード：スペイン中世都市史 イベリア半島 レオン コルドバ 大聖堂 モスク 教区教会

1. 研究開始当初の背景

イベリア半島には、史的・芸術的価値のきわめて高い都市が多いが、とりわけ8世紀から15世紀までイスラームとキリスト教の両勢力が並存していたという歴史的背景により、他の西欧キリスト教諸国とも現在のイスラーム文化圏とも異なる都市文化が今に伝えられている。これらの都市に関しては、伝統的に、制度史・社会史・考古学・建築史などの分野から、本国スペインを筆頭に欧米各国の研究者による豊富な研究の蓄積がある。しかし、スペインにおいて社会、政治から学問にいたるまで強く根を張った地域主義を反映し、各事例に関する個別研究の充実と比較して、全体像としては、未だにイスラームとキリスト教の二項対立という図式的な解説が多く見受けられる状況であった。

こうした単純な図式を超えて、各都市の形成史に関する詳細な記録同士をつなぐ新たな中世像を模索しているのが、近年の中世都市学の最先端の現場である。それでもなお、イスラームとキリスト教という研究ジャンル間のコミュニケーション不足もあって、まだまだ個別研究の成果を超えた明快なヴィジョンが示されていない。したがって、公刊された一次史料や既往研究など、遠隔地にあってもアクセスが比較的容易な資料を最大限に活用しながら、政治あるいは宗教的に中立の立場から、日本の研究者である申請者が新たな視座を提供できる可能性は十分にあると考えられた。

翻ってわが国の既往研究に目を向けると、個別研究の蓄積を統合せんという機運のもと構想された西洋中世学会(2009-)の設立が象徴するように、近年、改めてヨーロッパ中世への注目が集まっており、建築史・都市史の分野からの貢献も大いに期待されている。2013年に誕生したばかりの都市史学会においても、方法論を含めた西欧都市史の比重は小さくない。とくにシエナ(片山『中世後期シエナにおける都市美の表象』2013)、フィレンツェ、ヴェネツィアなどイタリア都市に関しては、欧米と比肩するきわめて高い研究レベルを誇り、研究者の層も薄くない。しかし、スペインの建築や都市、とりわけ中世の研究は、わが国ではこれまでほとんどなされてこなかった。都市史に限定して述べるなら、私見ではその一因は、都市国家や自治都市という、西欧中世が生んだもっとも斬新で典型的な都市類型が、スペインでは発達しなかったためであると考えられる。つまりイベリア半島では、政教の一体化の傾向が強いイスラーム圏のみならず、キリスト教圏においても都市自治の発達は遅れ、むしろ専制領主や司教座・大修道院などの教会権力が、都市のソフト面だけでなくハード面に関しても掌握していたケースが多いのである。しかし逆に考えれば、都市の中産階級や自立心の高い市民を想定することにこだわらず、世俗・宗教勢力の都市への介入(及びそれに伴う軋轢)に着目する

ことで、イベリア半島中世都市の特質をより明快に理解できるのではないだろうか。こうした発想が、本研究の出発点となった。ただし、切り口をより鮮明にし、また申請者がこれまで行ってきた教会堂やモスクの研究から得られた知見も十分に活かすために、本研究ではとりわけ宗教勢力と都市との関係性に論点を絞った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イスラーム、キリスト教双方の影響下にあったイベリア半島中世都市を広く類型学的に分類してその全容を把握すると同時に、レオンやコルドバなどいくつかの中都市の特定の建設行為や地区整備に着目し、各都市において宗教勢力が果たした役割を具体的に分析し、それが軍事・商業・政治的理由とどのように関連を持って中世都市の形成に寄与したのかを解明することである。

3. 研究の方法

本研究では、第一に、イベリア半島中世の都市形成の様相を包括的に捉え、近隣諸国との比較を可能とするために、大モスクを備えていた都市、司教座都市、ならびにドミニコ会やフランシスコ会などの托鉢修道院が郊外地区に構えられた都市、そして中世後期の時点でのちにスペインの典型的な都市市場となる「プラサ・マヨール」の原型を備えていた都市を対象に、宗教施設と、街道・城壁・市場といった都市の物理的構成との関係を類型化して整理した。この際、建造物を含む各都市の都市構造を概略的ながら均質に把握できる都市図として、オンライン・アクセスが可能な現在の地籍図(planocatastral, <https://www.sedecatastro.gob.es/>)をベースマップとして使用した。

これと平行し、レオンとコルドバという中世の骨格を良く残す中小都市を対象に、順次より詳細な分析を行った。大聖堂等の主要な宗教施設の規模やデザインの決定にどのような判断がなされたか、ならびに広場や都市住宅など、主要な宗教施設以外の都市構造や機能について、宗教勢力がどのような影響を及ぼしていたかについて検討した。

2014年はレオン、2015年と2016年はコルドバでの現地調査を実施した。2016年にはさらに、県都コルドバの状況を相対化するためにコルドバ県内の小都市モントロ、プリエゴ・デ・コルドバ、プハランセ、スエロスでの現地調査を実施し、歴史的建築や都市構造の現況調査のほか、都市図や諸文献の渉猟を行った。

4. 研究成果

(1) イベリア半島中世都市の分類

図1は中世から近世初期にかけて成立していたスペインの都市のうち、典型的な8都市を選んで同縮尺で示したものである。サンティアゴ・デ・コンポステーラ(1)は半島北西



図 1 中世スペイン都市（現在の地図(Sede Electrónica del Catastro) をもとに作成)

端に位置する巡礼都市であり、後期バロックのファサードが付設された盛期ロマネスク様式の大聖堂がある。レオン(2)は910-1230のあいだレオン王国の首都であったがその後カスティーリャ王国に併合された。フランス系ゴシック様式の大聖堂建設が始まったのはちょうどその転換期である13世紀初頭である。サラマンカ(3)とアビラ(4)は「レコンキスタ」時代の中期(11-13世紀)にキリスト教徒の前線基地となった。近世には大学都市として栄える前者では中世の大聖堂が壊されずに残され、その脇に新大聖堂が建設された珍しい事例である。16世紀に聖女テレサを輩出した後者の大聖堂は、ほぼ完全な形で残る中世の城壁と一体化している。タホ川に囲われた要害の地トレド(5)は西ゴート王国の首都(6-8世紀)、つづいて重要なイスラーム都市となった(8-11世紀)。1085年にキリスト教支配下に入っても繁栄をつづけ、王の庇護を受けたユダヤ人が活躍、商業や文芸活動が盛んに行われた。大聖堂は町のほぼ中央部に位置し、イスラーム時代の大モスク跡地に建てられたゴシック様式のものである。ジローナ(6)(スペイン語名ヘローナ)は地中海側でフランスと国境を接するスペイン北東端カタルーニャ州ジローナ県の県庁所在地である。オニャール川東岸の傾斜地にある旧市街の頂上、古代ローマの聖域にゴシック様式の大聖堂が聳える。バレアレス諸島マヨルカ島県都の港町 palma・デ・マヨルカ(7)は、中世から近世にかけて常に戦略上の要地であった。ゴシック様式の大聖堂は港側の小高い場所にある。コルドバ(8)はスペイン南部を流れる大河グアダルキビル川北岸に位置するかつてのイスラーム王国後ウマイヤ朝の都で

ある。大聖堂に転用された当時の大モスク、「メスキータ」(スペイン語でモスクの意)は、迷路のように入り組んだ旧市街の南西部に位置する。旧市街の規模で比較すると、小規模な都市(1サンティアゴ・デ・コンポステーラ、2レオン、4アビラ、6ジローナ)と大規模な都市(3サラマンカ、5トレド、7パルマ・デ・マヨルカ、8コルドバ)にはっきりと区別できる。

(2) 北西部の小規模都市の形態と大聖堂

比較的平坦な場所にあるレオンとアビラの大聖堂は、いずれも市壁に教会東端部が重なる形で建造されている。レオン大聖堂は城壁を東端部の基礎として利用した未完のロマネスク聖堂の存在が発掘から明らかとなっているが、ランス大聖堂の影響を受けたと言われる13世紀中葉からのゴシック大聖堂の建設は、急な下り斜面となっている城壁外部へ東端部を迫り出す形での大拡幅工事であった。古代末期の城壁に囲まれた初期入植地でありレオンと共通点の少なくないルゴヤ、アビラと当初の発展の経緯は共通するサラマンカやプラセンシアも大聖堂が市中心部からかなり外れたところにある。これらの都市では、ゴシック大聖堂が建設され始める12-13世紀ころから、大聖堂から離れたところに別の都市核が発生していく様子が観察できる。サラマンカの場合は、のちに矩形のバロック広場として整備される「プラサ・マヨール」がその象徴であり、最終的に旧市街のほぼ中央に位置することとなる。アビラでは前期中世の市壁の外部に多くの教会堂や修道院が建てられていく。かなり小規模の旧市街をもつレオンでも、大聖堂のほかにはまずサン・イシドロー、つづいて市庁舎、そしてプラサ・マヨールという異なった核がつぎつぎと発達していった。ただ、レオン大聖堂参事会は、ゴシック大聖堂の建設が始まる13世紀に商業地域や郊外を含む市内各所に急速に不動産を獲得しており、大聖堂や司教館という目に見えるモニュメント以外にも宗教勢力が都市に及ぼした影響は大きいと考えられる。

(3) レオンのサン・イシドローと大聖堂

イベリア半島北西部に位置するレオン(図2)は10世紀初頭にキリスト教王国の首都となり、カスティーリャ王国に実質的に併合される13世紀前半までレオン王国の首都であった。レオンには2つの重要な教会建築がある。10世紀頃に古代ローマの浴場建築を転用した王宮が司教座に下賜されて成立し、のちにゴシック様式で全面的に再建された大聖堂と、ロマネスク様式をよく残すサン・イシドロー参事会聖堂である。この両聖堂の建築と関係者の都市再編に果たした振る舞いを整理すると、以下のような段階を経ていたことが明らかとなった。

最初の段階はローマの軍営地が北部アストゥリアス王国のキリスト教勢力によって占領

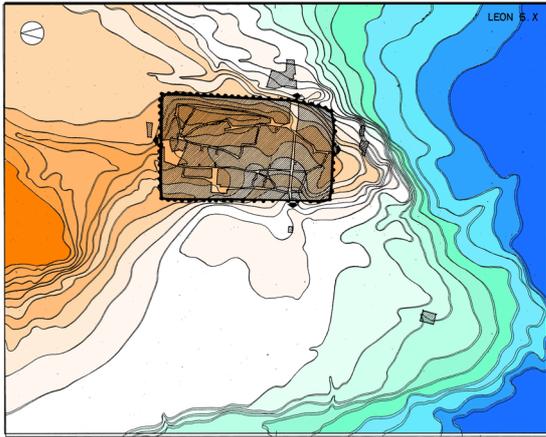


図2 レオンの地形と10世紀の状況

(León. Casco Antiguo y Ensanche. Guía de Arquitectura, Colegio Oficial de Arquitectos de León, León, 2000 をもとに作成)

された9世紀半ばから、コルドバのイスラーム勢力によって度重なる掠奪を受けて停滞する紀元千年ころまでである。この時期の都市構造はほとんど判明していないが、東西方向のメインストリートの東端部に既存のローマ建造物を転用した大聖堂が成立した一方、北西隅部にサン・イシドーロ聖堂の前身となる王立修道院が建てられた。

第二段階は建築様式的にはロマネスクにあたる時期で11世紀初頭から1230年頃までである。大聖堂はその後のゴシック様式による改築のため遺構から当時の状況を知ることは難しい。一方のサン・イシドーロは11世紀半ばから12世紀半ばにかけて断続的に建設された遺構が現存する。100年間という、短くはないが大きな断絶のない建設プロジェクトの進行状況と、同時期のレオンの都市構造の変化とは密接な関連があることが明らかになった。とくに、1160年代に、市壁外を通過していたサンティアゴ巡礼路を市内に迂回させ、サン・イシドーロ聖堂の前を通らせるルートを正式なものとした動きと、サン・イシドーロ聖堂南面ファサード前の広場の整備とは密接な関係があり、2つの時期の異なるロマネスクの扉口の図像も、こうした都市整備の一貫として再解釈することができることが明らかとなった。

第三段階は13世紀から中世末までで、この時期、大聖堂のゴシック様式による再建が行われ、大聖堂前の広場の整備が行われた。ゴシック大聖堂の建設はもちろん、西ヨーロッパ全土に見られる現象であるが、同時にレオンという旧都にとっては、勃興する市街南部の商業地区に対する、司教座聖堂の重要性を再定義し直すという都市再整備の意味合いがあった。ゴシック大聖堂がほぼ完成すると、目に見える建設行為を通じた教会勢力による都市介入は一旦落ち着くが、近世以降は不動

産運用というあまり目に見えない形で聖職者による都市計画・都市経済への介入は継続していくこととなる。

(4) 旧イスラーム都市の都市形態と大聖堂

レコンキスタ期の入植活動の要地であったサラマンカを例外とし、トレド、パルマ、コルドバはいずれも当初イスラーム都市として発展したという経緯を持つ。これら3都市の大聖堂はいずれもかつての大モスク(金曜モスク、イスラームの聖日である金曜日に、原則的に都市住民全員が参拝するため巨大な面積を持つ)跡地につくられている。ゴシック様式のトレドとパルマに対しコルドバにはモスクの建築が残されている点、丘上の要塞・島の港湾・大河に隣接した平地といずれも地形や都市機能が異なる点を考慮しても、大モスク=大聖堂はいずれも戦略的に重要な場所に建てられているが、必ずしも都市の中心ではない。イスラームの金曜モスクはカトリックの大聖堂よりも中央集権的な存在であったのに対し、キリスト教化した都市では大聖堂以外にも重要な教会堂が生まれてくる。10世紀をピークに人口が減少したコルドバでは市壁内の非都市化が進んだことで分散傾向がさらに強まった。

いずれの都市においても、大きな転換期は13-14世紀で、急速に発展したドミニコ会やフランシスコ会といった托鉢修道会が都市周縁部に修道院を設け、それらが大聖堂の統御の届かない部分の都市内都市をつくっていった。

(5) サンティアゴ・デ・コンポステーラとジローナ

大聖堂はいずれの都市においても最重要建築の位置を保ち続けてはいたものの、すでに中世後期の時点で大聖堂を単焦点とする都市はひとつも存在せず、複焦点宗教都市の様相を呈していたのは明白である。ほぼ唯一の例外がサンティアゴ・デ・コンポステーラであり、またジローナも他都市とはやや状況が異なる。

サンティアゴ・デ・コンポステーラの場合は市域が小さくそのほぼ中央を巡礼の終着点で町のレゾン・デートルたる大聖堂が占めており、その周囲に4つの広場が存在して市庁舎、病院等が置かれ、町の公共機能を満たしていたため、大聖堂がその周囲を含めた多機能施設として町の単焦点となった。市政も長い間大司教座の管轄下にあったのは不思議ではない。サンティアゴ・デ・コンポステーラの都市形成においてソフト・ハードの両面から教会が果たした役割は、イタリアのムーネやハンザ同盟都市において市民が果たした役割に匹敵するのである。

ジローナ大聖堂は町の頂部にあつて、長い階段によって周囲と切り分けられているため、確かに町の景観において視覚的焦点となっているが、都市機能はほとんど大聖堂無しで成立していたように思われる。つまり、サンテ

ィアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂の場合とは逆に、大聖堂は都市の内部に置かれた焦点としてではなく、古代以来のアクロポリスの性格を保ち続けたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 伊藤喜彦、再利用・再解釈・再構成されるローマ—コルドバ大モスクにおける円柱—、西洋中世研究、査読有、7巻、2015、73-96

〔学会発表〕(計5件)

- ① 伊藤喜彦、中世スペインの司教座都市と大聖堂クレリック・アーバニズム：イベリア半島中世都市の形成・整備における宗教勢力の役割(1)、日本建築学会大会(九州)、2016.8.
- ② 岡崎雄、伊藤喜彦、コルドバ旧市街の都市構造と近代化プロセス、日本建築学会大会(九州)、2016.8.
- ③ Y. Ito, Roles of the Clergy in the Urbanism of Medieval and Early Modern City of Leon, 19th Annual International Mediterranean Studies Association Congress, Universita degli Studi di Palermo, Sicily, Italy, May 25-28, 2016 (2016/5/27).
- ④ 伊藤喜彦、再利用による創造、増改築による保全:コルドバ大モスク(786-1523)、時間のなかの建築 リノベーション時代の西洋建築史(東京大学本郷キャンパス)、2014.11.
- ⑤ Y. Ito, New Power, Old Territory, and Renewed Architecture in the 10th-Century Kingdom of Leon, SNAP Conference, Power Relations and Religious Communities in the Western Mediterranean, Loyola Marymount University, Los Angeles, 2014.5.

〔図書〕(計1件)

- ① 伊藤喜彦、スペインの建築、スペイン文化読本、丸善出版、2016、34-49.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 喜彦 (ITO, Yoshihiko)
東海大学・工学部・准教授
研究者番号：40727187

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()